

〈常総エリア〉チーム

担当＝笹本純＋齋藤敏寿 文＝齋藤敏寿



つくば市に隣接する常総市にある石下西中学校校舎（以下、旧校舎）は、東日本大震災による被災を受け、応急危険判定後「危険」と判定された。そのため、2012年8月までに解体が実行されることを、4月に行ったCRプロジェクトリサーチの際に、常総市教育委員会から提示された。そこで、9月から開始される視点構築演習、チャレンジ学外演習に先立ち、〈常総〉チームは、4月から「石下西中学校との連携アートプロジェクト」を開始した。

概要

石下西中学校の旧校舎が取り壊されるということを知り、まずは、常総市教育委員会、石下西中学校の教員、仮設校舎で学んでいる中学生に話を伺った。震災直後に学生はどのように避難したのか、仮設校舎で学んでいる状況について、そして旧校舎に対する思い、考え方などである。

教育委員会や中学校教員から、当初より挙がっていた問題と課題は、以下のようなものである。

1. 旧校舎での思い出を作れないかと考え、旧校舎の記念品の製作などを模索したが、

震災後の様々な対応に追われ、実現できなかった。これから、なにかかたちにできないか。

2. 仮設校舎で学んでいる学生に、なにか学習支援のようなことをしてもらえないか。

3. 震災の記憶を単なる恐怖のみに終わらせることなく、新たな学びの機会に転化できないか。

そこから、押しつけとにならないような創造的復興支援の可能性を検討し、「奪われ、失われた生活への人の『想い』」を担った品物や材料を用いて、その想いに応じた成果を育むこと」を、プロジェクトの目指すべき方針とした。



常総市教育委員会でのミーティング

ミーティング～プロジェクト

4月4日10:00～12:00

常総市教育委員会、石下西中教員、筑波大学教員CRメンバーの初顔合わせおよび現場視察

——旧校舎解体が5月末予定との情報から、早急に行動を起こすことを決める。学生への連絡。

4月13日11:30～16:00

教員と有志学生が、石下西中およびプレハブ校舎視察。帰校後、ミーティング

——旧校舎の静けさとプレハブ校舎の中学生の活発さに驚く。

4月20日16:30～18:00

5C 203教室にて、教員と学生でプランを検討

——旧校舎とプレハブ校舎の、それぞれでできることを考える。

4月25日16:30～18:00

5C 203教室にて、教員と学生でプランを検討

——旧校舎がらみのアートワーク案、プレハブ校舎がらみのアートワーク案をまとめる。

5月9日15:30～17:00

石下西中にて、筑波大学教員と石下西中学教員によるプラン案打ち合わせ

5月14日17:00～18:00

芸術系工房印刷室にて、ミーティング。今後の計画を決定

——決定したことは、以下のとおり。

中学との打ち合わせをもとに、美術部の学生約30名を対象にワークショップを実施する。ワークショップの内容は、樹脂を用いたオブジェの制作、旧校舎の金具を活用した作品の制作にほぼ決定。

筑波大学学園祭「雙峰祭」で、石下西中プロジェクトとして、企画参加プロジェクト成果を発表する。

石下西中の文化祭で、プロジェクト成果を発表する（先方と要交渉）。

5月21日9:00～11:00

石下西中旧校舎訪問（素材集め1）

——各自、中学生とのワークショップや自分の制作に使えるものを持ち帰る。

5月23日12:30～16:30

石下西中旧校舎訪問（素材集め2）

——工具を使用し、部品をはずしたり、ガラ

スをはずして割ったりなど、大がかりな作業を行なう。トラックなどに積んで持ち帰り、大学にて保管、持ってきたモノのリストを作成する。

6月8日16:30～18:00

芸術系工房印刷室にて、ミーティング。持ち帰った部材を使って、何ができるかを検討

6月15日17:00～19:00

芸術系工房印刷室にて、ミーティング。部材を使った個人制作のプランを、それぞれ発表

——中学生とのワークショップで、樹脂を用いたオブジェ作り、ヘルメット掛けを再利用した壁掛けフック作成が決定。壁掛けフックの試作品を作る。

6月28日15:00～17:00

筑波大学教員2名と石下西中学教員（教頭と美術担当）による、ワークショップ打ち合わせ



旧校舎の解体が進められている（6月28日時点）

7月19日10:00～15:00

芸術系工房印刷室にて、ワークショップの準備&事前ミーティング

——樹脂関連の準備「ガラスに離型剤を塗る／ガラスへの印づけを施す／樹脂を固める際（事前準備の段階）に必要な台へ、ガラスを固定する／樹脂の上に置いた部材を固定する際に必要な台を作る」。壁掛けフック関連の準備「金具のかたちを整え、滑りをよくする／土台となる木材にマグネットを接着する／土台にジェッソを塗る」。

7月20日15:00～17:00

芸術系工房印刷室にて、ワークショップの準備

——樹脂関連の準備「一定のラインまで、ガラスに樹脂を流し込む」。

7月26日7:30～17:00

石下西中でのワークショップ当日、仮設校舎美術室にて実施

9月7日3限4限

2学期開始。視点構築演習スタート

9月10日17:00～18:00

芸術系工房印刷室にて、ミーティング。今後のスケジュール確認

9月14日12:15～16:00

6A 204教室にて、ミーティング。雙峰祭へ向けて展示計画・作品制作プランの検討

9月21日12:15～16:00

6A 204教室にて、ミーティング。雙峰祭へ向けて展示計画・作品制作プランの検討

——学生各自が、制作・展示計画を提示。ワーキング経緯紹介やキャプションなど、石下西中プロジェクトの統一展示デザイン案を検討する。

9月28日12:15～16:00

6A 204教室にて、ミーティング。雙峰祭へ向けて、作品進行説明、キャプション案検討

10月4日12:15～16:45

視点構築演習：各エリアプロジェクト中間報告会

10月5日9:00～18:00

6A 204教室にて、雙峰祭の準備

10月6日～8日

筑波大学学園祭「雙峰祭」、6A 204教室にて石下西中プロジェクトの成果公開

10月23日12:15～16:00

6A 204教室にて、石下西中文化祭の展示内容打ち合わせ

10月23日15:00～17:00

常総市地域交流センターにて、筑波大学教員と石下西中学教員による石下西中文化祭の展示内容打ち合わせ

10月26日15:00～18:00

常総市地域交流センターにて、石下西中文化祭の展示準備

10月27日9:00～16:00

常総市地域交流センターにて、石下西中文化祭プロジェクトの成果公開（会場撤去 16:00～17:00）

11月8日12:15～16:00

石下西中アートプロジェクト総括、反省会。最終報告会に向けて打ち合わせ

11月23日3限4限

CRプロジェクト最終報告会

主立ったミーティングとプロジェクトの実施は以上だが、学生、教員は随時、個々に制作活動や打ち合わせを行なった。



生徒の活気にぎやかな仮設校舎



被災した石下西中学校旧校舎の図書室



2011年3月11日のまま時間が止まった黒板



旧校舎から持ち帰ってきた品々



オブジェ作りに熱中する中学生たち



みんなの作った作品を見せ合う



雙峰祭で石下西ワークショップの作品を展示し、成果を報告



双峰祭でプロジェクトの経緯を紹介



石下西中学校の「記憶」と「再生」が展示された

実施

石下西中学校との連携アートプロジェクトとしての活動をまとめると、以下のとおりである。

1. 被災を受けて解体される校舎から回収された部材・生活用品などをモチーフとして、アート、表現を行なう。

2. 震災後、旧校舎から新校舎ができるまでの間、仮設校舎での学びの場にて、筑波大生と中学生が作品制作を通じて交流を行なうワークショップを企画運営する。内容＝樹脂を用いたオブジェ作り、ヘルメット掛けを再利用した壁掛けフック作成。

3. 1と2の成果を公開する。内容＝筑波大学雙峰祭にてプロジェクトの成果展示(10月6日～8日)、石下西中学校文化祭にて

プロジェクトの成果展示(10月27日)。

・関係教員＝筑波大学芸術系(笹本純教授、齋藤敏寿准教授)、石下西中学校(校長、教頭、教務主任、美術担当教員)

・参加学生＝筑波大学学生(学群3年3名、4年5名、大学院1年2名、計10名。授業履修学生5名)、石下西中学校生徒(1～3年26名、ワークショップ参加)。



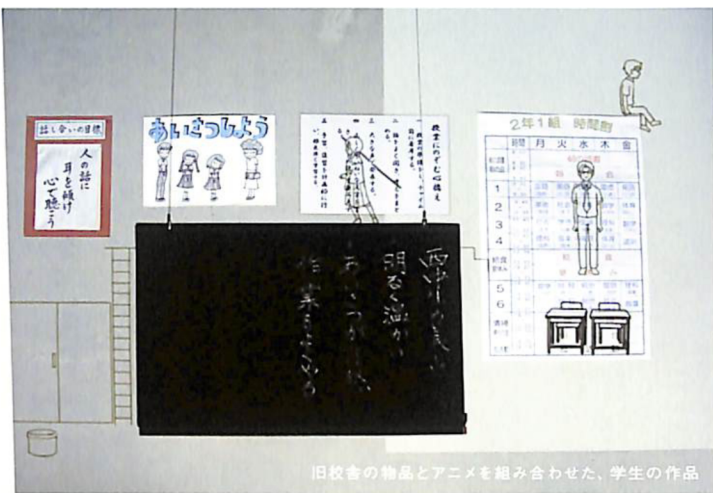
旧校舎のガラスを再利用し、学生が作った花器



旧校舎のガラスを再利用し、学生が作ったアクセサリーと箸置き



旧校舎の風景を切り取った、学生による写真作品



旧校舎の物品とアニメを組み合わせた、学生作品



旧校舎のガラスを再利用して陶器の入れ物のふたにした、学生作品



旧校舎のカーテンを使った、学生作品

入ってすぐある写真作品の、「なくなっていた」という変化を
デジタルに突き出されるという事がとても強く脚に残りました。
ふたを削いで中が見えるという作品も好きです。
震災それ自体の前には、普通の日常というものを改めて
とらえられるような作品でした。
石下西中 卒業生です。
素敵な企画をありがとうございました。
窓ガラスで作った、というものが夏ととき、
「ああ、本当に地震で校舎がかわるような感じがした、この瞬間
とすごく近い感じがした。」
(B君)

もう(校舎)は無い。レゾナンス - 阿部 潤
アートという形は、私には、表現の手段として、
新しい世界をつくれる。思っています。
私自身、アートを通して、表現の手段として、
ガラスと紙とを、製作して、
花やパンティ、小物入れなど
を作りました。思いは、品々、いろいろ
形にのせて、アートをしようか
震災前の日常を持ち運んで、アートを
作る時間、残りの時間を、大切にしたい。

校舎があったときは、
中1でした。
筑波大のみなさん、あり
かいありがとうございました! 元気です!
普段は触れられないものに触れられた
感じが良かったです。
石下西中 卒業生の
石下西中 卒業生の

石下西中3年生にかかっています
お母さんの母です。一点お母さん。
後、半年で卒業になりました。
このときに見に来た
とても良かったです。
そして、ありがとうございました。
また、とこも、心に
る物にありがとうございました。
格闘家として、とこも、涙が
でそうになりました。



阿部 潤 [芸術専門学群4年]

授業を履修しようと思ったのは、この機会を逃すと、実際に被災地に行くことが
ないだろうと思ったからである。復興のボランティアを授業の単位にするというこ
とに関しては、賛否両論あるが、授業のかたちにする事で、私のような学生にとっ
ては復興について考えるきっかけになると感じた。

常総での活動は華々しいものではなかったが、石下西中の生徒たちが楽しそう
に活動してくれたことがうれしかった。大学の近くでは交流することのない、中学
校と関わることができたこともよい経験となった。

松添冴李 [芸術専門学群4年]

はじめに被災した中学校の視察があり、ボロボロな校舎を目にし、ショックを受けた。
その後、中学生たちに会ったのだが、彼らは、こちらが圧倒されるほどエネルギーに
満ちあふれていた。その元気がとても印象深く、「なにか楽しいことができるのでは
ないか」と感じたのだが、実際に中学生と共同で行なったワークショップでは、取り
壊される校舎から集めた物品を使い、たくさんのおもしろい作品を作ることができた。
捨てられていくはずだったものに新しい命が吹き込まれ、素敵な時間を過ごせた。

中島靖雄 [芸術専門学群3年]

石下西中プロジェクトの復興支援は、旧校舎の存在を、思い出として捉えなおす
ための手助けであったように思う。生徒たちは意識的に感じないかもしれないが、
いまの仮設校舎での生活を肯定し、より前を向いて生きていくことを後押しでき
ていたらよいと思う。ひとくちに復興支援というが、そこにはいろいろな支援が含ま
れていて、今回のような記録型の支援も、復興のひとつのステップとしてたしかに
あるということが実感できた。生徒たちがいつか、あの展示やワークショップには
こんな意味があったのかも、と思い出してくれたらほんとうにうれしい。

学生=原田夏帆、中島靖雄、福山菜穂子、阿部 潤、松添冴李、
中林まどか、宮野菜、大島玲子、藤田奈々子、栗原拓人

まとめ

失われた空間・モノから創造した作品の制作、そして、仮設
校舎で学習する中学生と、ワークショップを通じて交流し
たことによる現場での学び。それが、プロジェクトを通じて
学生個々が得た成果である。様々な震災後の支援ニーズ
はこれからもたくさんあると思うが、今回のチームでの試
みが、少しでも新たなニーズ解決の一助となることが期待さ
れる。石下西中でのCRプロジェクトとしての活動は、今回
で終了予定であるが、この機会をきっかけに、筑波大の学
生と中学生の間の美術を通じた学習支援の場として、継
続可能であればつなげていきたい。案としては、中学校美
術部との夏休みワークショップなどを検討している。また、
石下西中学校新校舎でのプロジェクト成果展示(要交渉)
や、被災校舎と仮設校舎での学びにおけるアート表現を記
録する作品の作成なども、可能かもしれない。

なお、プロジェクトを振り返って、今後の課題として挙
がったのは、「責任の所在と連携相手とのきめ細やかなコ
ミュニケーションの構築」、「通常の日常への回復を創造的
に支援すること」であった。

被災を受けた校舎での避難生活から、仮設校舎での学
びのなかで、石下西中の教職員は、震災を忘れないという
思いと、新校舎に向けて動いている様々な思いを抱えて
いる。そんななかで、CRプロジェクトは関わらせていただ
いた。旧校舎からの思いを伴ったものを使用してのワーク
ショップ、アート作品制作がもつ意義——忘れてはならな
い——と、早く忘れて前に進むための環境づくり——振
り返る要素をできるだけ排除したい——という、現場での
葛藤を見たようである。仮設校舎で学ぶ中学生は、2年生、
3年生が旧校舎にいたわけだが、不便はあるとは思いうもの
の、ワークショップを通じて接したかぎりでは、ひじょうに
パワーのあるごく普通の中学生たちであった。

このプロジェクトを通じて筑波大の学生も、日常とは何
か、その生活のなかでの少しの非日常を創造すること、支
援することとは何かを、学び、経験をしたであろう。今後も
様々なニーズに対する地道な活動を通じて、人の尊厳を
尊重し、創造的であり、信頼を獲得する支援活動とは何か
を、常に問うことを課題としていきたい。